

## Local Sophodynamic Equilibrium :

### 地域における専門知と経験知の平衡

中申 孝志

年末年始に帰省し、久し振りの親族とよもやま話。そこで和やかなまま済めば良いのだが、ほろ酔いのご年配の方から前近代的でローカルな文化習慣を振りかざして説教され「いつの時代やねん」「どこの話やねん」と辟易した経験は、みな多かれ少なかれあるだろう。それは、おそらく外国人であっても、自分の実家に帰省したら同じなのではなかろうか。なぜならそこが当人たちの「<sup>ローカル</sup>地域」だから<sup>1</sup>。



日本では、当世は猫も杓子も国際化、グローバルである。一方で自分たちの足元の「地域」にも目を向けるローカル視点も重要視される。“Think globally, act locally.” などとも言われる。なおこのフレーズに続けて“..., damn globalization!” という人を筆者はよく見かけるような気がするが、それは筆者の周囲だけかもしれない。

「国際的教養」なるものがあるとすれば、それが求められるのは「国」と呼ばれるある種の「地域」の、そのボーダーを越えるとき、つまり越境するときだろう。国“nation”を越境する「国際的」は“international”であり、学問分野“discipline”を越境する「学際的」は“interdisciplinary”であり、2012年の望月新一氏による数学のABC予想の解決の理論で有名になった「宇宙際タイヒミュラー理論」の「宇宙際」は宇宙“universe”を越境する“inter-universal”である。ともかく「際」が使われるような「領域を越境するとき」に求められる教養と、領域内で求められる教養とは、理学と工学、科学と技術のように、異なるものではあるけれど、お互いにシームレスに続いているものなのだろう。「国際」と「地域」、グローバルとローカルも、同様に捉えることができよう。

和歌山大学では、2012年の教養教育改革の時に、「教養」を「専門」「常識・スキル」に対置すべき存在として位置付けた、と筆者は理解している（図1）。

教養が、学問的あるいは専門的な知のあり方ではない知のあり方を指すのであれば、教養と地域の関係性を理解するヒントになりそうなものとして、「ローカルノレッジ」という概念がある。元々は文化人類学や民俗学の用語のようで

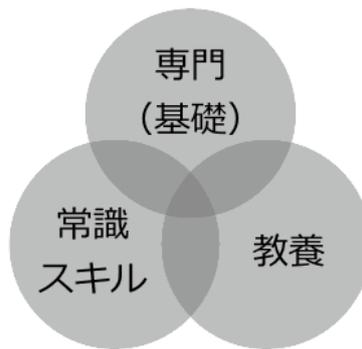


図1 (筆者の解釈による)和歌山大学における「教養」の位置付けの概念図。

ある。藤垣（2008）は文化人類学者Geertzによるこの語の説明<sup>ii</sup>を「局所的（ローカル）であることを避けることができず、手段に分割できず、現場の状況から分離することができない知識」と訳している<sup>iii</sup>。現在では様々な学問分野で使われている用語らしいが、筆者は勉強不足のためよくわからない。筆者が知っているのは、この語が科学コミュニケーション論の分野に借用（転用）されるケースである。実際の生活の場では、学問的に正しくない知識・理解であっても通用することがある。学問的あるいは専門的な知ではない経験知も「役に立つ」。そのような知識や理解の仕方を指す言葉として使われる。これに関連して、廣野（2008）は、科学コミュニケーション論の文脈で、

33♦

日常生活では、科学知識はいったん解体され、日常生活に適用しやすいように再構築されたうえで、利用されることが知られている。この際、必ずしも正しくはないかもしれないが、日常生活においてはそのように理解しておくほうが都合がよいので、その都合よさを捨ててまで自然観や認識の仕方を置き換えはしない。  
(p.83)

とした上で、

このように今日の自然科学は原理的な場面では非常に効果的だが、日常生活にもれなく適用できる状態には至っておらず、その間隙に関しては、ときに一般市民の方が的確な自然の知識をもっていることがある。こうした知識はローカルノレッジ（local knowledge）とよばれる。(p.86)

と述べている。

「役に立つ」、これは頭の使い方を制限しようとする悪魔のささやきである。いや、ささやきどころか悪魔の決め台詞である。悪魔はこの「役に立つ」を放つこ

とによって多くの「知」を抹殺してきた。「役に立つ」は「知」の敵である——現代では。

この、「役に立つ」を「知」の敵とみなす言説は、現代が、学問、中でも科学・技術に支えられた豊かな生活を送ることができる時代だから言えることかもしれない。

それ以前の時代には、直接役に立たない知識を持っているだけでは、それは死を意味していたに違いない。例えば江戸時代は現在より寒冷で、おそらく流行性の感染症はもちろん衛生上の問題から発生する疫病も多く発生していただろう。そこでは「役に立つ」知識こそが身を守る手段になっていただろう。地域ごとにそういう知恵が蓄積され共有されてきたであろうことは想像に難くない。だから、現在「ローカルノレッジ」と呼ばれるものは本来そういうものだったのであろうし、例えば中谷宇吉郎が「科学以前の心」と呼んだものも本質的には同根のものと言えそうである（中谷，1941）。そのような知恵の有無は、現代と異なり、生死に直結するが故に、生き死にを賭けたその生活の「場」、環境に強く依存するだろう。ここで言う「場」あるいは環境とは、自然だけでなく、人々及びその社会、文化習慣も含む。従って必然的に（そこで暮らす人々を含んだ意味での）地域に固有な<sup>ローカルノレッジ</sup>知恵になる。

頭の使い方には分析と総合がある。手元の辞書（デジタル大辞泉）によれば「分析」は「複雑な事柄を一つ一つの要素や成分に分け、その構成などを明らかにすること」「哲学で、複雑な現象・概念などを、それを構成している要素に分けて説明すること」とある。具体的な要素に「分ける」ことで「分かる」ことを目指す頭の使い方である。それに対し「総合」は「個々別々のものを一つに合わせてまとめること」「分析的思考によってとらえられたいくつかの部分・要素を結び合わせて統一的に構成すること」とされている。即ち「総て」を「合わせる」わけである。個別の具体的な事象の理解であるローカルノレッジは必然的に分析的な傾向を帯びざるを得ない。一方、抽象化・体系化を目指す学問的なあり方はおそらく総合の頭の使い方の印象が強いのではなかろうか。多くの人々が健康的で文化的な社会生活を送ることができる（と言ってよさそうな）現代の我々にとって「頭を使う」という知の営みは、これらのどちらかだけでは不十分だろう<sup>iv</sup>。具体的な世界で得られる経験を総合し、一般化・体系化を通じて抽象的・総合的な知へと昇華する。そして一般化・体系化された抽象的な世界の知を動員することで目の前の具体的な現実の経験を分析し、具体的・分析的な知を新たに形作る。この両方向の頭の使い方を繰り返し続けることで（図2）、我々は、個人としても人類全体としても、知を獲得してきたし、これからもそうあるべきだろう。ナイーブな考え方と一蹴されるかもしれない。だが、この「知のダイナミズム」とでも呼べる営みは、何より、愉しいのである。

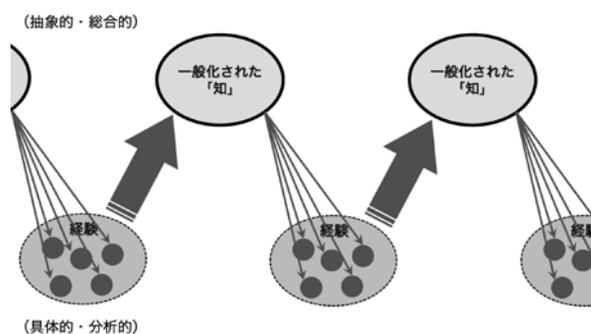


図2 筆者の考える「知のダイナミズム」のイメージ。



「教養ということばで表される何か」が持つ性質の一つは、「多くの人の中で共有されている（べき）知恵」というのが挙げられるのではないだろうか。一人一人が抱く「教養」の範囲、「教養」像は、少しずつ異なるとしても、多くは大部分が重なっていて、例えば集合を表現する「ベン図」のように多数の人の思う「教養」を描いていけば、重なり合って、ぼんやりとしたグラデーションで囲まれた集合、「みんなの教養」が浮かんでくるだろう（図3）。

「教養」がそのような「共有されるもの」であるなら、「地域内で（生きるために）求められる教養」とは、その地域（の人々・社会）で蓄積され共有されてきた、文化・習慣、世界観や、発想・思考のパターンのようなものも含まれるような知恵、ということになるだろう。

大学、特にいわゆる地方大学は、近年、その地域の知の拠点、Center Of Community (COC) となることが求められるようになった。大学の持つ学問知あるいは専門知を地域に還元することが求められている。これは単にパブリック・アウトリーチとして学問知の普及を図ることに留まらず、むしろより具体的に地域の問題解決に資すること、「役に立つ」ことが主眼であると言えるだろう。実際に地域住民の方々と話していると、学問は「要らない」どころか、むしろ邪魔だと思っている節さえ感じられることもある。問題の答え「だけ」が欲しい。

大学に籍を置く人が地域に関わると、そのような問題解決に資するような何かを求められる。そのためには、当該地域のローカルノレッジ的なもの、知恵の集積を知っていなければうまくいかない。地域おこしには、「若者」「馬鹿者」と並んで、地域の者と異なる視点を持つ者である「よそ者」が重要、あるいは必要とも言われる。しかしそれでもなお、「よそ者」がその地域の何たるかを理解しておくこと、ないし理解しようと努めることは、必須の条件であろう。

この、「大学に籍を置く人」には当然、大学生も含まれる。学生が地域に入っ

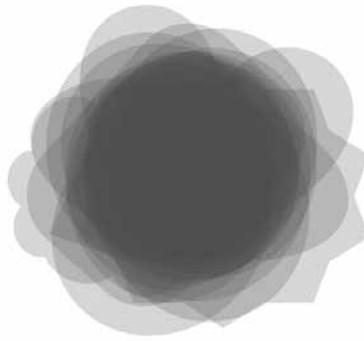


図3 各人の「教養」が重なり合うことで浮かび上がる「みんなの教養」のイメージ。

て学ぶ意義とは何だろうか。

和歌山大学観光学部のカリキュラムには「地域インターンシップ」プログラム（Local Internship Program; LIP）というものがある。これは学生がグループで地域に訪問・滞在などしながら様々な調査や活動を行い、地域の「問題を地域の人々とともに考え、解決方法を探る」いくもので、「現場において観光と地域のあり方について実践的に考えることができる機会であり、地域の人々の思いを理解しつつ、地域活性化の方法を提案できる力を養うことを目指し」ている（和歌山大学『大学案内 2020』, p.76）。

◆36

現実には、むしろ学生が大学で学んだ「専門」を発揮する以前の問題が頻繁に起きていると、担当のある教員は述懐していた。受け入れ側である地域からは、基本的に学生は使い物にならないから、せめて労働力として汗水流してくれるだけでいい、要らぬことをしないでくれ、という声さえもあるとのことであった。ここで「それ見たことか、だから大学でベンキョーすることなんか役に立たないに決まってるんだ」と考えるのは、ちと、あわてん坊さんである。そこで終わってしまったのは、小学1年生の「きょうは、がっこうからでて、〇〇をしました。たのしかったです」と大差ない。そうではなく、専門性を実践する前に、そもそもその場に参加させて頂くために理解しておくべきことが存在することを、学生たちは、そこで初めて体験的に学ぶのである。実際、その述懐していた担当教員は「そうして自らの浅く甘い考えを思い知らされてからが本番だ」とも言っていた。地域で求められる教養は、localize = 局所化されているが故に、排他的でもある。学問的・専門的な知と、その地域で蓄積された経験知とは、ローカルな世界での知の力学関係は非平衡状態、圧倒的に経験知の方が格上の状態なのである——少なくとも知の価値の転倒が起こった後の現在の日本では<sup>vi</sup>。その、何もしなければ専門知が吹き飛んでしまう非平衡状態を、学生各個人の中で、どうやって望ましい平衡状態に近づけられるか<sup>vii</sup>。折り合いをつけるか。そしてそう

いう具体的・個別的な経験を（多様な地域で）重ね、それぞれの経験の意味を分析して学ぶ。経験の蓄積がある閾値を超えるとそれらを総合できるようになる。そうして得られる「メタ視点」こそが、グローバルな教養とされるもの（があるとすれば、それ）とつながる、両者に共通の本質的なものではなからうか。単に外国で短期間の留学をしたことがあるぐらいでグローバル気分な人もいるが、そんなものは、冒頭で書いたような意味での「<sup>ローカル</sup>地域」を一つ体験しただけである。



最後に、「教養」とは少々離れるが、関連して、地域への大学の関わり方について。

大学教員は研究者である。パーマネントであっても、研究者としてのアクティビティが高ければ、より良い研究環境を求めて、例えば10年程度で異動するのはよくあることだし、特に若手研究者は任期付きの職ばかりなので、長くても5年程度で否応なく異動する。そのような研究者も、大学での仕事であれば地域に関わることになるが、その地域にとっては悪い意味での「よそ者」である。5年は、その地域の何たるかを学び取るには短過ぎる。

しかも地域貢献は大学が生き残るための方策としては今や必須の要素だから、そのための役職を大学は用意しなければならないが、しかしそのポジションは今のご時世では自動的に任期付きになる。研究職のパーマネントポジションが非常に狭き門になっている現状では、研究に燃える任期付き若手研究者たちも多くは遅かれ早かれ「アカデミックポジションなら何でも良いから喉から手が出るほど欲しい」状況に置かれる。そして本来の専門性とは直接関係のない分野・仕事内容である地域貢献のためのポジションであっても、それがパーマネントでなくても、生きるためにはその職に応募せざるを得ず、採用されればその職に就く。こうして地域を知らない任期付き若手研究者が地域貢献を担わされる。そして、ようやくその地域を理解する頃には任期が切れる。残念なことに、その短い任期中にいくら地域貢献の仕事を頑張っても、多くの場合、その仕事は本人にとって研究者としての業績にはならない。そもそも地域のニーズは学術研究ではないし、それが業績になるのは、「地域」ないし「地域貢献」そのものが研究テーマである研究者だけである。こうして若手研究者が使い潰されて行く構造があることは、指摘しておきたい。地域貢献の仕事は、地域の理解、地域の教養を身に付けるために腰を据えて長期間にわたって続けることが可能な任期無しのパーマネントポジションの大学教員でなければ、本来できないのである。

しかし、この「地域貢献をいくら頑張っても研究業績にはならない」ことは、

パーマネントポジションにいる大学教員にとっても同じである。本意ではない分野・仕事内容にも関わらずパーマネントでの採用だからと就職し、いつの日か「本来あるべきところ」に異動することを夢見つつ、日々を地域貢献に費やす教員も少なくないだろう。しかし研究職の異動には研究業績が必要である。地域貢献に代表される「研究業績にならない仕事」に振り回されている間に、専門領域の研究時間を取られ業績も作れないまま、気付けば本来の研究の最前線から取り残されてしまう。業績が無いので異動もできず、従ってそのまま地域貢献の仕事が続けざるを得ず、結果的に地域を理解し地域の教養を身に付けてしまう頃には「鳴かず飛ばずの大学教員」が出来上がる。異動もままならない研究者に残された道は、その現状のまま「研究しない研究者」になるか、自らの専門性を捨て修業し直し「地域」を対象とする研究ができるほどの専門性を身に付けて(=博士号を取り直して)「地域を研究するプロ」になるか、研究職をあきらめて転職するしかない。

こうして、大学が持つ本質的な財産である「研究という営みができる人」が失われることで、大学という存在そのものが地域貢献に食い潰されていく構造があること、そしておそらく、それは「知」に対する日本の根本的なレベルでの病が具現化したものであることが、いずれ明らかになってくるだろう、という主張を、マジックの「予言」に倣ってここに書きつけておき、筆を置くことにする。

◆38

## References

- 中谷宇吉郎, 「科学以前の心」, 中谷宇吉郎(著)・福岡伸一(編)『科学以前の心』(2013)所収, 1941.
- 廣野喜幸, 「科学コミュニケーション」, 藤垣裕子・廣野喜幸『科学コミュニケーション論』所収, 東京大学出版会, pp.65-91, 2008.
- 藤垣裕子, 「受け取ることのモデル」, 藤垣裕子・廣野喜幸『科学コミュニケーション論』所収, 東京大学出版会, pp.109-124, 2008.
- 和歌山大学, 「大学案内2020」, 2019.

<sup>i</sup> 本来なら、まずlocalの対訳として「地域」が相応しいのか、の議論をすべきところではある。物理学で言えばlocalは「局所(的な)」であろう。

<sup>ii</sup> 藤垣(2008)の註によれば、原文・出典は以下の通り: “To an ethnographer, the shapes of knowledge are always ineluctably local, indivisible from their instruments and their encasements.” (Geertz, C., *Local Knowledge*, Basic Books Inc., U.S.A., 1983.)

<sup>iii</sup> 藤垣(2008), p.116

<sup>iv</sup> 昨今、散見される反知性主義的な動きは、現在の日本が、ローカルノレッジ的思考だけで良い、それしかしたくない、という方向に急速に向かっているように、筆者には思われる。中には「江戸時代の日本に戻るべきだ」とする主張すら見かけるが、前近代的世界に戻りたいのだろうか。

<sup>v</sup> それは地域に限らず日本に限らず世界的な動きのようにも見える。世界的にも共通な「ポスト・トゥールース」と呼ばれる大きな潮流の一つの表れなのかもしれない。

<sup>vi</sup> この「知の価値の転倒」については、これまでに本年報第1号、第4号、第5号に掲載された拙著論考を参照されたい。

<sup>vii</sup> 天体物理学や気象学で重要な物理概念に「局所熱力学平衡 (Local Thermodynamic Equilibrium; LTE)」というものがある。十分に「ローカル」なサイズでその状況を見たときに、熱力学的な平衡が成り立っていることを指す。